

「墮落」の要因①個人編

企業経営漫談士 岡野実空

「原因はすべて内にあった」。破綻寸前の日産自動車に乗り込み、その真因を究明して、再建策を発表した際に発したC・ゴーン氏の言葉です。その再建後、氏はその発言内容の正しさを、今度は自ら証明してみせました。

今回のコラムは、男にとってその代表ともいえる、酒と異性、趣味などの行動や事象ではなく、個人が墮落する心の内なる原因を分析します。(因みにミドルの放蕩は、大半が不正の証。ネクタイが派手になったら、要注意！)

要因1: 自己満足

日本能率協会の大先輩である畠山芳雄氏に、某経営者の墮落とその原因を尋ねたとき、その返答は「自己満足」の一言。要は、「自分はいい線行っている」と思った瞬間が墮落の始まりということですが、このとき氏の頭には、恐らく旧海軍士官学校の訓戒、「五省」があったのではないかと思います。因みにそれを現代語訳すると、「1. 真心に反することはなかったか、2. 言行不一致はなかったか、3. 精神力は十分であったか、4. 努力は十分であったか、5. 最後まで精一杯取り組んだか」ですが、論語並みの「三省」にしておけば、もっと下々までしっかり浸透したはず。とは言っても、戦争の結果は一緒でしたね。

要因2: 自己欺瞞

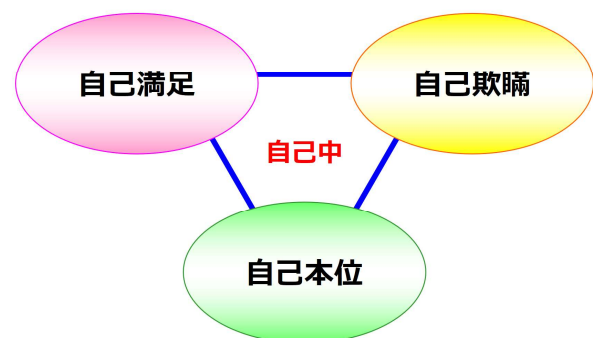
旧海軍は素晴らしく、旧陸軍はとんでもない組織、という「常識」は、いまも根強い人気を誇る歴史小説作家たちの少々偏った解釈が世に定着したのですが、その真実を知りたい方には、永野護氏の『敗戦真相記』(バジリコ刊)の一読をお薦めします。(この本は本当に何度も読む価値あり)

要は、事実を見ないようにして自分を欺いたら、せつかくの「五省」も空振りということですが、終戦直後の永野氏講演の核でもある、「マネジメントの不在」がいまだに続いている、場合によってはさらに低下していることに愕然とします。「マネジメント」の原点が「事実」の認識にあること、それを見る目が曇っている、マネジメントが機能するはずはないことを、改めて肝に命じておきましょう。

要因3: 自己本位

「独善」は、国や企業を自滅に導きます。シミュレーションを何度やっても勝てないというような状況で、「敵は無気力」のような根拠なき前提条件を設定し、やってみなければ勝敗は分からないと、

E-8 「墮落」の要因①個人



戦争に突入してしまう類の自己中心的な意思決定は、さまざまな形でいまの社会にも存在します。

心ある方々がいま、「昭和」との時代の類似性をさまざまな形で警告していますが、こと経済に関しては、「資本主義の行き詰まり」という人類未知の世界に突入してしまっただけに、さらなる怖さを感じます。

ここ10年、脳科学の研究が飛躍的に進歩し、上記に関わる脳の働きが徐々に解明されています。しかし「墮落」に結びつく行動は、人権の問題もあって検査やその分析に頼る訳にはいかず、「自制」が基本であることに変わりはありません。従って個人が、まず各自しっかり「内省」し、次に「対話」をつづじてその「強み」「弱み」を共有して、相互補完する必要があります。激動の時代を乗り切る「相乗効果」は、まず生き残るための「相補効果」の基礎があってこそ機能するのです。

ゴーン氏を他山の石に、私たちもまずは「自己(再)認識」から。

「あなたたち自身の中を探しなさい。そうすれば、すべてを見つめることができるだろう。」(ゲーテ)

2019年8月16日(初出平成29年3月20日) 実空